失言レストラン

京本　葉一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
失言レストラン

【Ｎコード】
Ｎ４０９８Ｖ

【作者名】
京本　葉一

【あらすじ】
ファミレスで出会った若い男女。まったく想いが交わらない二人の、なにかと残念なショートストーリー。

「ゴハンになさいますか？　それとも、ライスになさいますか？」
選択の余地がない質問をまえに、僕はおもわず相手を見つめた。
相手の女の子は、自分のミスに気づいたのだろう。少し戸惑いながら「すみません」と苦笑していた。
僕は小さく笑ったあと「ライスでお願いします」とだけ伝える。人間にミスは付き物だ。しかも、どうやら彼女は新人で、きっと僕より年下だ。害のない失敗で、わざわざ文句を言うことはない。
「あの、お水のおかわりは？」
彼女に言われて、コップの水が残り少ないことを思い出した。引っ越し作業のせいで、身体が水分を求めていたらしい。
「じゃあ、それもお願いします」
僕は彼女の心配りに頬をゆるめて、コップの水を飲み干した。
彼女はオーダーを繰り返したあとで調理場へ向かう。気をつかってくれたのか、すぐに氷水のはいったポットを持ってきてくれた。
「ありがとう」
僕がそう伝えると、彼女はとても素敵な笑顔を見せてくれた。
とてもいい感じだったけれど、水の注ぎ方がよくなかった。ポットの蓋が外れて、氷水が勢いよくこぼれだす。驚いた彼女が余計な動きをとってしまい、僕の左胸にまで氷水がかかってしまった。
彼女は慌てふためきながらも、ポットや布巾をテーブルに置いて、自分のハンカチを取り出す。
「申し訳ありません、お客さま、大丈夫ですか？」
さすがに冷たくて、僕の心臓も驚いていた。
「ちょっと、胸がキュンとしたかな」
と、僕は素直に冷たかったことを告げた。
見ると、彼女は自分のハンカチを僕の左胸にあてたまま固まっている。きっと、まだパニック状態なのだろう。よい対応とはいえな

い。これほどのミスともなれば、注意をしたほうが彼女のためだろう。
「君は、自分が何をやったかわかってる？　僕の胸がこんなに騒がしいのは、君のせいなんだよ？」
僕が文句を言っていると、店長らしき男性があらわれた。
「お客さま、申し訳ありません。すべて私の指導不足です」
彼は的確に指示を出し、彼女にタオルを持ってこさせ、テーブルの処理も済ませてしまった。彼女を責めることもなく、ていねいで好感のもてる対応だった。
ふたりが去ったあとで、僕は気づく。
僕が文句を言わなくても、あの店長はきちんと指導をするだろう。失言だった。僕は彼女に無駄な説教をして、不愉快な思いをさせたに過ぎない。
彼女に、謝らないと。
僕の想いが通じたのか、注文したセットメニューを彼女が運んできてくれた。
「先ほどは、失礼いたしました」
彼女は僕に一礼をしたあと、テーブルに料理をならべる。
「いいよ、気にしないで。僕のほうこそ、君にあんなことを言ってしまって、ごめん」
僕の言葉に、彼女の動きが止まる。僕を見ようとはしなかった。頬がほんのり紅く染まって、なんだか恥ずかしそうに見えた。
「ごめんなさい。ああいうこと言われたの、初めてだったから、どうしたらいいのかわからなくて……」
彼女が傷ついていたことを知り、僕は恥ずかしくなった。
「いや、ほんとに気にしないで。それにさ、女の子にごめんなさいって言われたら、男は引き下がるしかないよ」
彼女は僕をちらりと見たけれど、何も答えなかった。
なんとか彼女の気持ちを和らげようと、僕は焦って場違いな言葉を選んでしまったらしい。たしかに、下手な冗談だったと思う。

気まずい沈黙が、ふたりの間に生まれてしまった。
僕がもう一度謝ろうとしたとき、彼女も何かを言おうと口を開けて、同時に、僕の携帯電話が着信を知らせた。彼女が口を閉じて、どうぞ電話に出てくださいと、目で訴える。僕も仕方なく口を閉じて、携帯電話を手にとった。
ママからの電話だった。
僕はすぐに電話にでると、引っ越し作業のことを中心に、新しい生活の第一歩をママに報告した。五分か十分ほどだったと思う。会話を終えたとき、彼女の姿はどこにもなかった。それから何度もこの店で食事をしているけれど、彼女の姿を見ることは二度となく、僕はいまでも謝ることができずにいる。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4098v/

失言レストラン

2011年10月9日14時07分発行